

## 北海道協同集会、200人、60団体が参加

手島繁一（東京都／法政大学・講師）

6月13日、北海道で初めての協同集会が北海道大学を会場に開かれた。当日は「リラ冷え」と呼ばれるこの時期独特の肌寒い天候であったが、全道各地から、あるいは長野や石巻など道外からの参加者も含めて約200人、60団体が参加し、お互いの協同の実践を交流しあう熱気に包まれた画期的な集会となった。

いずれ本集会の内容を詳細に伝える記録集が刊行される予定であるが、とりあえず概要だけをお伝えしたい。

### ネットワークづくりの出発点に

集会は、北海道に本格的な労働者協同組合をつくろうと準備を重ねてきた釧路・旭川・苫小牧・砂川の各企業組合・事業団とセンター事業団の思いと、昨年6月の京都の協同集会に触発された道内の学者・研究者の思いが結びつき、反響が大きくなるように広がる中で開かれた。

オープニング・スピーチにたった実行委員長の山田定市・北海道大学教授はこの点に触れて「生協、農協、漁協などの既存の協同組合だけではなく、共同作業所、福祉保育労組、国労闘争団、福祉・障害者施設、産直グループ、自主経営グループなど、さまざまな協同の実践集団に出会うことができ、また学者・研究者が30人以上も賛同の意を表している」と指摘、「この集会を『地域づくり』と『仕事おこし』を共通の目標とする地域民主主義運動のネットワークづくりの出発点に」と呼びかけた。

### コープアイランド＝北海道

基調講演にたった太田原高昭・北海道大学教授は、「北海道は基幹産業が第一次産業であり、農協、漁協、森林組合などの第一次産業にかかわる生産協同組合は地域における有力な経済主体として大

きな役割を果たしている。生協も、例えば道南の江差町で世帯数ベースで100%を越えるなど、全国水準より高い組織率を誇っている。協同組合間提携という点でも、産直運動の展開などで先進的な経験を有している。こうした意味で、北海道はまさにコープアイランドと言える」と、北海道における協同組合運動の到達点を評価し、今後の課題としてICA東京大会における「基本的価値」議論に学びつつ「地域に責任をもつネットワーク型組織として協同組合を自己確立することが求められている。そのためにも、労働者協同組合の本格的な確立とその事業・運動の展開が待ち望まれている」と結んだ。

### 石巻、別海、企業組合道連合会から

全体集会ではこのほか、石巻事業団、別海厚生企業組合、企業組合北海道連合会からそれぞれ報告がなされた。

宮城県の石巻事業団の菊地理事長は、労働者協同組合・高齢者協同組合・映画「病院で死ぬということ」を石巻市と周辺の1市9町へ訴えて回るなかで、労働者協同組合の公共的役割への理解をひろげ、仕事を着実に増やすとともに、地域づくりの主体として事業団そのものが成長していった経験を報告した。

つづいて、北海道における地域づくりの典型として、日本一大きな町である別海町での経験を厚生企業組合の吉野さんが報告。開拓入植→自衛隊基地設置→リゾート開発と目まぐるしく変わる「国策開発政策」に対抗して、当初基地反対で生まれ結集した地域の諸グループが次第に地域づくりの主体として目覚め成長していった経験が叙事詩のように語られた。

全体会の最後の報告にたった企業組合北海道連合会の友理事長は、季節労働者の就労と生活を

守る制度的保障を勝ち取ってきた闘いの意義を評価しつつ、今後は制度を改善する闘いと労働者が自ら事業をおこし就労を確保する労働者協同組合の確立が焦眉の課題であることを強調した。企業組合の歴史的転換にもあたる集会で、多くの人々の期待と激励に包まれたことへの感動から、思わず絶句する大友さんに会場から暖かい連帯と励ましの拍手が沸き出した。

### 三つの分科会

その後、3会場にわかれて分科会が行われた。分科会のテーマと報告者は以下の通り。

#### 【第1分科会】「協同で地域をつくる」

- ① 剣淵北の杜舎 横井寿之
- ② 農業・健康・環境を考えるオホーツクネットワーク 川崎克
- ③ 豊富町兜沼小中学校 平間信雄
- ④ 道央市民生協 木村隆広

#### 【第2分科会】「協同の力で築く事業と経営」

- ① 共同作業所連絡会北海道支部 北村典幸
- ② 株式会社くみあい食品 瀬尾英幸
- ③ 労働者協同組合おといねっぶ 吉田儀則
- ④ 日本労働者協同組合連合会 山田英夫

#### 【第3分科会】「協同運動と労働者・労働組合」

- ① 北海道市民生協労働組合 柳田文雄
- ② 北海道農協労連 西秀行
- ③ 札幌保育労働組合 土岐由紀子
- ④ 協同総合研究所 手島繁一

### 協同の思想・原理による再生へ

閉会集会では、各分科会での議論が紹介された後、日本労働者協同組合連合会の永戸副理事長が発言にたち、「分科会で報告あるいは発言された様々な『協同と創造』の取り組みに感動した。こうして一堂に会して協同を語る意味が確認できたと思う」と感想を述べ、さらに「労働者協同組合が自立して立ち上がることは、様々な協同の実践に活力を与えるものになるだろうし、新しい社会・経済システムの一つの基礎となるだろう。今、あらゆるものが協同の思想・原理によってつくり直され、再生されることが求められている。この集会を北海道における新しい時代の幕開けとしよう」と呼びかけた。

集会は「協同集会の継続的開催」を呼びかけた山田定市・実行委員長の結びを全体で確認して終了した。

### <協同のひろば>

## ベンポスタ・子どもサーカスが来日

### —スペインでの子ども共和国の実践—

森田彦一（東京都/株フォワード）

スペイン北西部ガリシア地方にあるオレンセ市郊外に子どもたちの「共同体」がある。その名を「ベンポスタ子ども共和国」という。

その子ども達がいま来日「ベンポスタ・ロス・ムチャーチョス・サーカス」として7月15日の横浜公演を皮切りに、全国60公演を行っている。

「強いものは下に、弱いものは上に、子どもはてっぺんに」を合言葉に1年のうち3ヶ月は、全世界をサーカスでもってかけめぐり、子ども達と交流を行い、世界の平和を訴えている。



「ベンポスタ子ども共和国」が誕生したのは1956年9月15日、いまから37年前である。創立したのはヘスス・セサル・シルバ・メンデス神父。

彼は子どもの頃、スペンサー・トレイシー主演の「少年の町」という映画を観て衝撃を受ける。

カトリック聖職者のフラナガン神父がアメリカ・オマハに非行少年たちのための更生施設としてボーイズタウンを建設した物語りである。

この映画をきっかけに、神学校に進学、オレンセ市に住みつき、10才から12才の少年からなる15